

OB丸橋くんの活躍がラグビーマガジンに掲載

毎年、菅平合宿に参加してくれているOB丸橋祐紀くん(平成21年・第62回卒)は、日立一高を卒業後、早稲田大に進学し、名門クラブ:早稲田大学GWRC(通称GW:ジーダブ)でプレイしていますが、最終学年で主将に選ばれ、今年の関東学生クラブ選手権で優勝を果たし、その様子がラグビーマガジンに掲載されました。(2015. 1月号7ページ)

卒業後の選択肢にはいろいろありますが、体育会に入らなくてもラグビーを続けることは可能だし、それぞれのステージで頑張れば、今回のように脚光を浴びることもあります。(もちろん脚光を浴びることが最終目的ではありません。)

現役部員・若手OBの励みになるように、とりあげてみました。
丸橋くん・早稲田GWのみなさん、優勝おめでとうございます。

121
文/藤島大

Dai COLUMN Heart

渋谷、午前9時10分。雨。当事者は差の機嫌が気になるだろう。地下の改札より駒沢大空駅へ向かう。2014年、11月9日。ジャパンとマオリ・オールブラックスの接戦から一夜明けて、大切な試合がそこから徒歩の駒沢競技場で行われる。ただし、スタンドはない。「駒沢」と「競技場」のあいだに「補助」がはさまる。

午前10時キックオフ。関東学生クラブラグビー選手権大会第6回早稲田大学GW・山梨学院大学グリーンイーグルス戦。勝者すなわち覇者の大一番だ。

ウイナムアップ。一足、GWは頼りなく映る。体質重のサテライトにあたる山梨学院の面々の胸の隆起には及ばない。なかなか泣きまぬ天も軽量の側には敵とぞうた。

離れたところの控え部員らしき者の会話がすかすかに聞こえる。あるいは若い卒業生が「アエロプロットの安チケットでパリへ...」。たぶんGW側だろうと距離なく思った。

両校がグラウンドの半面ずつでコンプレッションに励む。山梨学院の圧倒的優勢、という印象がやや後退した。ボールを抱えたGWの選手は被タックル想定で地面に体をさげるのにグリーンイーグルスはさうしない。立ったままハーフに渡した。

定期の2分過ぎ、青春に「優勝」の二文字を添える戦が始まった。目撃したのは「心が強いチーム」の爽快なほどの躍動だった。イメーじとは異なり胸板の薄い15人はたくましかった。

前半うな、早稲田GWはノータッチのキックを切り返し、ラックを経て、小柄ながら足腰の強靱な目撃

キャプテンの丸橋祐紀(日立一高)が鋭く投げる。そこへサポーターが到達。うまづなで先制トライを奪った。

初めてのチャンスとさもあることとく仕留め切る。あ、この風情に「仕留め切る」という言葉はこの先も登場する。GWはチャンスにバニックにならない。ここよく好機を仕留め切る。すなわち心が強い。

7-15の同点。ラインアウト後から回し、防壁の後へキック、インゴールを陥れる。さらに5分後、自陣起点のパンツに蹴りかきりPを得ると、速攻を仕掛け、背後へ蹴り込み仕留め切った。スクラムの動きに苦しみ、ボール争奪で上体を抱えられると身動きできず、なにに引5、後半オキにも、自陣深くのほれ球を7番の中山周平(都立北園)が拾い左ライン際を強引。これまた最適な角度のサポーターが働いてトライへ結んだ。

そこからは山梨学院の切り切ったFW戦に追い上げられる。だが13点リードの後半20分、一瞬のターンオーバーを仕留め切りを決めた。

40-27。腕力に劣る側が口笛でも吹くようにトライを蹴らせる。ふと、26シーズン前の菅平合宿の神話のアップが思い浮かんだ。

終盤、丸橋主将聞いた。なぜバニックにならないのか。「数少ないチャンスは前足として取り組んできたので動揺はないのかな」と質問が動揺していた。君たちは自己分析に走る。ありのままでは、攻撃を議論してわかったのは、卒業の本当の意味で素直と無邪の姿、目の前に起きる事態に自然に没頭

おれの体力と知力と気力を迷いなく発揮する。それが1930年創立の「ブレイ」色の機軸の中間(&ホワイト)の伝統はずである。敗戦後、山梨学院の事がフエアな気風にふさわしく悔しさを押し殺しながらGWベンチ前を警視した。ただし、そこに実質の監督もコーチもない。学生のみで運営。試合中の交番指示は、3年の控えハーフ、一ノ瀬洗司(東大松戸)が行い、みずから後半に出場している。

この日、岡田理生(静岡)、齋藤伶央(本郷)、山本馨(山梨学院)の速いライン防壁は際立っていた。春の管轄に懐石主将が母校・日立一高の夏合宿に参加した際、元早稲田監督の松子俊志先輩に相談したら

「前へ出る」と一言。幹部で話し合つて実行。すると9月に入ってから「自分でもびつくりするくらい」勝てるようになった。

さて卒業のGWでも、同じ学内の赤黒ジャージをどうラグビー部とぶつければトラブ事産は難い。運動部には自主の意思とはまた異なる深い先実があつて心身を鍛え上げている。ただオールブラックスですら、そのレベルにおいて常に心が強いとは限らない。ナイーブな取りこぼしの歴史もあつた。

いつしか補助競技場の雨はぼんやりしている。古いOBたちが財布を開いて宴の足じと現役生を囲む。チャンスのあわで予備に体を張る。ラグビーのひとつの理想。なんと足杯にふさわしい後輩であることか。

CHIEZOU HAYAKAWA

試合後、感懐したOBを前に喜びの表情を浮かべる早大GWRC(通称ジーダブ)の選手たち。写真左から6人目(一歩前に出ているのが)丸橋祐紀主将

7